

ジョン・ダンの遠征

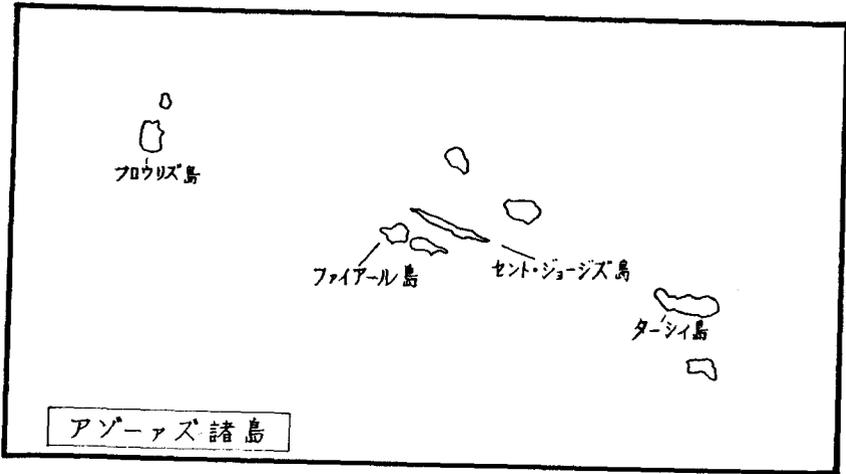
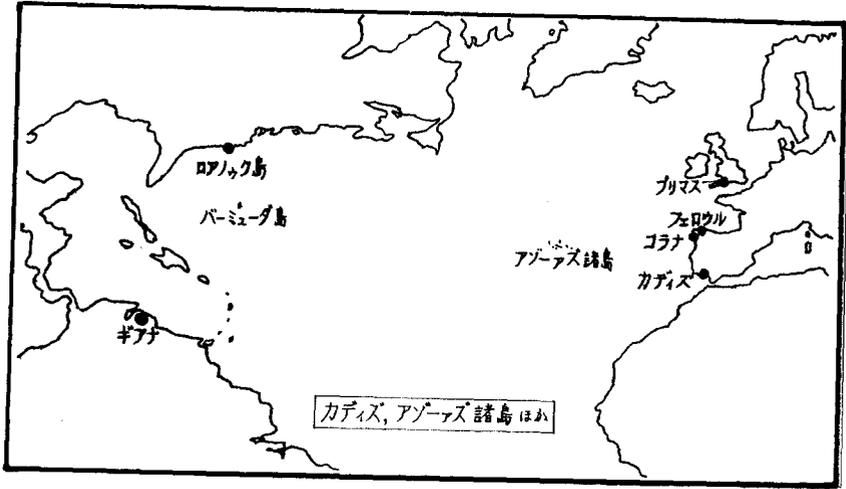
櫻井正一郎

序

本稿の内容は次のようなものである。一、カディズ (Cadiz) 遠征とエビグラム三篇、二、アゾーアズ (Azores) 諸島遠征と書簡詩三篇。

主な目的は作品解釈である。これらのエビグラムと書簡詩は、いうまでもなく旅行文学そのものではないが、旅行文学と比較し、そのときの遠征の詳細を背景に収めると、より確かに理解できるように思われる。この主な目的から、副次的な目的が派生する。当時の旅行文学はどのようなものだったか、その一角を眺めておきたい。そのために、旅行文学をなるべく多く引用して訳出し、引用した原文を注にかかげておいた。日本で旅行文学は、目に触れやすいとは限らないからである。

まず事実を整理しておきたい。ダンは二度だけ海外遠征に参加した。一度目のカディズ遠征は、一五九六年、二五才のときの三ヶ月余り、二度目の諸島遠征は、翌年、これも三ヶ月余りであった。この二つの遠征は、イギリスの海外遠征のなかでどのような位置をしめていたのか。対スペインとの抗争に限ってそれを略述してみると、



大西洋を横ぎる西方との交易で、イギリスはポルトガル、スペインに遅れをとり、一六世紀後半から、二国ことにスペインの利権を奪取することに活路を求めていた。フランシス・ドレイク (Francis Drake) は、カリブ海に侵入(一五七二)したあと長征し(一五七七年)、新大陸からノヴァ・アルビオン (Nova Albion) を奪取した。スペイン艦隊アルマダ (the Armada) の撃破は一五八八年の出来事だった。サ・ウォルター・ローリ (Sir Walter Raleigh) は一五九四年、幻の金鉱エル・ドラード (El Dorado) を求めて、スペインが先に入っていたギアナ (Guiana) に侵入、そのローリはギアナ侵入の前に(一五八五—八七)、新大陸ロアノック (Roanoke) 島に入植を試みて失敗、その失敗を中断のままに放置していたのも、その後ギアナに代人を送っていたのも、スペインとの交戦にいとまがなかったからだ。ダンンの二つの遠征は、この時期に行われている。その後イギリスは、一六〇三年に対スペイン戦争を終結し、ヴァージニアへの入植に成功、バーミューダ (Bermuda) 諸島の占領は、一六〇九年から一〇年にかけて行われた。

一方、ダンが参加した二つの遠征は、ダンの伝記のなかで、どのような時期にあたっていたのか。遠征前のダンは、リンカン法学院での修業時代にあった。遠征後は、國務大臣ロード・キーパー (Lord Keeper) の秘書官として、初めて官界に入っている(一五九七年十一月)。この官界入りは、やはり遠征に参加していた、ロード・キーパーの息子トマス・エジャトン (Thomas Egerton) の口ききによるものだった。当時の若いジェントルマンは、官界入りの準備行動として遠征に参加していたが、ダンもその例にもれなかった。一方、詩人としてのダンは、遠征に参加したときすでに、初期の作品群のなかの重要なものを書きあげていた。諷刺詩のおそらく三番までと、ローマ風恋愛詩エレジーの全篇、更に『唄とソネット』のなかの一部の作品だった。遠征に参加した詩人は、遠征を題材にした作品を、意が向くままに書ける段階にいた。

しかし、ダンは気が向くままに、たまたま遠征について書いたわけではなかった。一つには、遠征について記録を残すのは、遠征という営為の一部とみなされていた。指揮官たちは、遠征の成功を強調したり、失敗を弁明したりするために、遠征記を書いた。それを書かせるために、専門家を雇って旅に同行させていた^①。一般の参加者たちは、オックスフォードで遠征記録を収集していた愛国者、リチャード・ハクルート (Richard Hakluyt) から、遠征中に日記をつけ、それを提出してくれるように頼まれていた。ハクルートは、観察してきてほしい事柄をリストにあげ、そのような手引は次第に組織的なものに拡大していった^②。ついでながらイギリスの遠征記は、スペインでは国家が主導したのに対して、このように民間が主導して隆盛をみたのだった。遠征に加わったダンには、かくして、遠征記が求められるという環境があった。しかしダンは、たとえ軍役だったとはいえ、帽子に羽毛を飾り、銀糸の刺繍が入った半コートを着て^③ 随伴した、若いジェントルマンの一人だった。このような階級の若者が遠征に加わったとき、彼等に求められていた遠征記は、商人、船乗り、兵士たちに求められていたものとは、自ら別種のものであった。ダンよりも時代は下るが、彼等のお手本になったらしい遠征記があった。ヘインズ (Haynes) によると、ジョージ・サンズ (George Sandys) 著『紀元一六一〇年にはじまったある旅の報告』 (*Relation of a Journey begun An. Dom. 1610*) がそれであつたらしい^④。ヘインズは、この『報告』の性質と照し合せながら、若いジェントルマンが書く遠征記の性質について、次のように述べているのは興味深い——

そのような遠征記は、一般的には、筆者自身を語るものであり、筆者の見方 (what he can say) についてのものである。…特定の題材を拡大したり (amplified) 人のとりあげないようなものまでとりあげる (diversity of interests) のが奨励される。また、なんらかの文学的な才能が不可欠である。^⑤

ダンが諸島遠征をめぐって書いた三つの書簡詩は、将にこのような性質をもっていた。これらの書簡詩は、そのような性質の一種、遠征記を少なくとも許容し、あるいは期待していた環境のもとで書かれたのだった。

ダンが遠征について書いたのは、まず、書くことが遠征という営為の一部とみなされ、しかも、内容が個人的なものでも許容されていたからである。しかし、もう一つには、書いたものが認められれば、ひょっとして官職への道がひらけるかも知れなかったからである。これもダンより後でおこったことだが、書いた遠征記が買われて、それだけで官職をえた実例がある。サ・ヘンリー・ブラント (Sir Henry Blount) は、地中海東部地方への唯一の遠征記『レヴァント地方への航海』 (*Voyages into the Levant*, 1636) を書き、これによってチャールズ一世から年金を授けられた。^⑦ 年金だったのはブラントがすでに高齢だったからで、官職をえたのに等しい。ダンが遠征について書いた詩のうち、三つの書簡詩は、法学院でえた友人に宛てられたが、宛てられた人物以外の間にも回覧されていた。それは残っている筆写原稿の数から明らかである。ところで、ダンの初期 (一五九〇年代まで) の詩の編者ミルゲイトは、この時期のダンの詩の読者を、「法学院の仲間」と、『カディズ遠征』及び『諸島遠征』に加わった航海仲間^⑧、の二グループに限定している。^⑨ 「航海仲間」は同年配の若いジェントルマンであり、法学院の仲間とともに、官界中央と縁故があった。そのような読者に遠征について書いた詩が認められて、官職をえる可能性がダンには残されていた。

ダン是一種の遠征報告を、書くべくして書いたのだった。

一、カディズ遠征とエピグラム三篇

カディズ遠征記には、ハクルートの編^①、パーチャス (Samuel Purchas) の編^②、ローリー直筆の遠征記^③の三つがある。ハクルートの事業を継いだパーチャスによる遠征記は、ハクルートの短縮版で、事実上二つは同じものである。

この遠征は一五九六年の年初に計画された。スペインはアルマダが撃破されたのち、イギリスの意に反して再び艦隊を強化しつつあり、これを早めに打ち砕くというのが計画の目的だった。総指揮をとるエセックス伯の人氣も手伝って、法学院生が中心の若いジェントルマンたちは、競って参加を志願した。ダンはこのエセックス伯に、つてを頼って願ひ出て、同伯に直接受理されたのだろうとみられている^④。ダンが志願した動機には、次のようなものがあげられる。遠征報告を書く動機にもなった、狎官運動のためには、遠征は絶好の機会だった。ヘレン・ガードナーが強調した^⑤。ダンの愛国心が駆り立てたこともあろう。逆境を経験して人間を作りたいという、シドニー流のストインズムもあつただろう。しかしながら、早くも本稿の結論にふれることになるが、動機は、こういった次元とは異なる次元にも、みておかなければならない。一般にルネッサンス人の行動は、形而下の動機だけで理解されてはならない。他人の鏡を通さない行動、いかえれば、演者としての自己表現を伴わない行動は、動機をめぐっても、とりあげる意味は低い。ダンが参加の動機を自ら述べているところは、厳密に言えば結局遠征をめぐつた作品全体ということになるだろう。しかし、諸島遠征のときに書いた「風」の一部が、深い次元の動機がどのようなものだったかを、直接物語っていて極めて重要である。風で船が進まないのをめぐって、

ダンは次のように絶望している――

腐った国家のもと、しかもそこにポストをもくろんだためでありました、

愛し愛されるときの不愉快まる苦しみから逃れたかったこともありましたが、

名誉か美しい死への渴望もありました、

だがどの目的が一番強かったかなどはもう問題ではなくなりました、

私の目的は〔風のために〕達せられませんでした。

Whether a rotten state, and hope of gaine,

Or to disuse mee from the queasie paine

Of being belov'd, and loving, or the thirst

Of honour, or faire death, out pusht mee first,

I lose my end: (37-41)

原文の *or* で並べられている三つの動機はそれぞれに重要ではある。それぞれは、ローリ、スペンサー、シドニーなどのルネッサンス人がいだいた共通の心情であった。しかしながら、筆者がいう深い次元の動機とは、これら三つの動機のことではない。三つの動機は、旅が失敗した今、自嘲をともなって諷刺され、嫌悪されている。深い次元の動機とは、ほかでもない、こういった挫折を味わうこと自体であったように思われる。このような動機、目的を、ダンが発見するとき自分の心の奥深いところで知っていたと筆者は思う。この判断は、直接には、二つの遠征でダンの詩心が本当に動いているのは、挫折に対してだけである事実に基づいている。さらにまた、間接には、ダンという人間の、一生のありように拠っている。ダンは、ここにみられるような挫折を型に定め、その型

に合せて自分の生涯と文学を形成していった。ダンを遠征に駆り立てたものは、大袈裟に言えば、動機と結果が区別できない、一種の宿命のようなものだったように思われる。以上は実は本稿の結論である。ここでいきなりそれを示すのは唐突のようだが、あらかじめ論の展開を知っておくという意味はあろう。しかし、この結論に至るまでには、これから長い道のりを辿ってゆかなければならない。まず、カディズに遠征したダンは、なにを見ているか、どう書いたのだろうか。

イギリス艦隊は、女王の許可状がでてから二ヶ月以上たった三月三日にプリマスを出港し、二一日にはカディズ湾奥に退いたスペイン艦隊を撃破した。このときの詳細はローリが詳しく記録している^⑤。それによると、ローリの船に続いてハワード (Lord Thomas Howard) とダッドリ (Sir Robert Dudley) の船が敵の旗船フィリップ号に接舷すると、フィリップ号からも他の船からも、兵隊たちはあたかも、「あちこちの港で一度に石炭袋から石炭が煙をあげてはき出されるように」、海面に飛び降りた。彼等は船が英軍に捕獲されまいと自船に火をつけ、フィリップ号と聖トマス号は炎上した。そのときの地獄絵をローリはこのように描いている――

船腹の両側におこった光景はまことに憐れむべきものでありました。多数が溺死し、多数が身体に火がついたまま海中に飛び込みました。多数がロープを伝わって船腹を降り、唇のところまで水につかってロープの端にしがみついております。多数が重傷のまま泳ぎつづけるうち、水中で弾をうけ、苦痛を知らされました。

その間、フィリップ号の船上では、巨大な炎があがり、大砲には爆発がおこっております。その他の敵兵に炎が迫ったときの様子は、地獄を見たい変わった方がおられれば、そこに地獄の生きた姿をご覧になれました^⑥。

一五九六年六月二一日のカデイズ湾における戦い。(オランダ人によるハクルト『主要航海』一二巻本の第四卷二五六頁折込より。)



ついでながら、この局面をハクルート[®]よりもローリの方が活写しているのは、自分の判断で接舷した武勳を誇示したからである。ローリの遠征記にはこのようなところがあった。

さて、ダンはこのときの勝利を、次のようなエピグラムで記念している――

炎 上 船

燃え上った船が炎から救助されるには

沈没させるほかなく、船から

飛びおりた者は、英船に近づぐにつれ、

銃撃されてことぎれていった。

乗っていた兵隊は次のようにしてことごとく死んだ、

海にいたのに焼かれ、船が焼けたのに溺れた。

A Burnt Ship

Out of a fired ship, which, by no way

But drowning, could be rescu'd from the flame,

Some men leap'd forth, and ever as they came

Neere the foes ships, did by their shot decay;

So all were lost, which in the ship were found,

They in the sea being burnt, they in the burnt ship drown'd.

ポイント(最終行)は 'burnt' と 'drown'd' を入れかえた交換語法である。'drowning' と 'rescu'd' (二) 'lost' と 'punof' (五) の間に遊びがある。ポイントの前半「海にいたのに焼かれ」は三―四行の内容を、後半「船が焼けたのに溺れた」は一―二行の内容を、それぞれ要約しながら、機智を加えている。このような知性と洒脱は、ダンがマーシャルを学んでいたことと、読者になった者たちの高い知性とを物語っている。ダンはローリが活写した状況を六行で描ききっており、総じてこの作品はエピソードとして高い水準にある。

カディズ湾に残っていたスペイン船団を敗走させたのち、イギリス軍は同じ二一日のうちに、半島にあるカディズの町に上陸した。このときの戦いで名誉の死をとげたのが、歩兵隊を率いていたサ・ジョン・ウイングフィールド (Sir John Wingfield) だった。サ・ジョンは、巧智をめぐらして町の外壁を突破し、市街地の白兵戦で太腿に負傷した。しかしそれでは退かず、唯一人の騎乗イギリス軍人となって、中央広場の征圧に加わったが、スペイン軍の標的となって弾丸に倒れ、五日後遺体はカディズ大寺院に葬られた。死と葬儀の模様をハクルートは次のように記述したが、パーチャスもこの記述を一語も変えずに自分の記述にとり入れている。

与えられた榮譽に価する高名な騎士サ・ジョン・ウイングフィールドは、町に入るとき太腿に重傷を負ったが、にもかかわらず我が身を省みず、家来によって注意深く運ばれながら、部隊を励まし指揮しなければならなかったが、頭部を小銃で打たれて、まことに不運にも殺されてしまった。…

土曜日は二六日に、サ・ジョン・ウイングフィールドは埋葬された。時と場所の事情が許すかぎりの、立派で武人に相応しい埋葬であった。葬儀のとき、我が海軍の殆ど全ての砲が参加した礼砲は、司令官たちの適切

なる命のもと、肅然として轟いた。

二七日は日曜日ゆえ、その寺院で礼拝がとり行われた。立派な説教がホブキンズ師とかによって語られた。師は尊敬するエセックス伯がつれてこられた、知識が深い、声のよい牧師であった。

ダンはこの英雄を記念して、次のようなエビグラムを書いた。

サ・ジョン・ウイングフィールド

旧世界の高地ヒルを越えて、太陽の揺籃へ、頂上へ、

また寢所へと、遠征を試みた人は多い。

我等のエセックス伯爵は、日没が遅いあの島に、一層安らかな

高塚ヒルを授けられた。伯爵はご存知だったからだ、

勇気と距離において、ウイングフィールドに優る者なし、と。

Sir John Wingfield

Beyond th'old Pillers many'have travailed

Towards the Suns cradle, and his throne, and bed.

A ffter Piller our Earle did bestow

In that late lland; for he well did know

Farther then Wingfield no man dares to go.

ヘラケルスの古事によると、地中海への西入口に、南北に位置する二つの山（ジブラルタル山とアピラ山）があり、この二つが旧世界の西の境とみなされていた。イギリスの遠征は、その境をこえて、東（太陽の播籃）、南、西へと伸びていた。カディズの町は高地にあり、また川によって分断された半島にあったので、「高地」とも「島」ともみることができた。当時の大航海の行き先は、西インド諸島、ロアノック島、アゾーアズ諸島など、島が多かった。カディズの地を「島」と呼ぶと、ウイングフィールドの遠征が、あたかも航海時代の諸遠征を代表するような効果が生まれている。高地、太陽の動きで示されている方位、山に重ねられる塚と、このエピグラムは、英雄の死を描くのに相応しく、大きい。英雄の死を描くために、遠征記は細部を言葉を重ねて述べるが、この歌は英雄を天球と地球の中に置くだけで、言葉少なく英雄を描ききっている。このような性格のエピグラムは、『ギリシア詩華集』(The Greek Anthology)のなかの、墓碑銘のエピグラムに属している。ちなみに、外地で武人を葬る歌を書いたハーデー¹⁰とハウスマン¹¹は、このエピグラムを知っていたのかも知れない。

さて、イギリス軍はカディズの町の中央広場を午後遅く制したあと、夜には早くも掠奪に走った。カディズは新大陸が発見されてから、主にスペインの交易船の帰港地として、富を蓄えていたので、バーバリ海賊 (Barbary Pirates) などによって何度も掠奪が繰り返された。掠奪に活路をみいだしていたイギリスも、ドレイクが一五八七年にこの地を掠奪して焼き払っている。それから九年後のこの掠奪では、士官には家一軒、兵卒には部隊ごとに一区域が割りあてられた。

掠奪ほどの遠征でも遠征のハイライトであった。ところが、一般に遠征記は、掠奪の記述に及ぶと、少なくとも自分はめぼしい分捕品にあずからなかったと繰り返すだけである。カディズでのこのときの掠奪についても、

ハクルートへの報告者は、次のように苦しい説明をしている――

この町の富の状態について、それをお尋ねの方〔訳者注、ハクルートのこと〕が満足されるような答えは、私にはできない。なぜなら、本当に、私に関しては、私の運は、それに恵まれた人に較べるとよくなく、恵まれた人でもせいぜい一ペニーの現金、一ペニーの値打の品物を分捕っただけだった。もつとも、私の運が悪かったお蔭で、この町を少しも貧しくせずにすんだ。しかし、平の兵士だけでなく、船員までが手に入れた、高価な品物から判断すると、また、かつて野蛮な掠奪者〔訳者注、トルコ人など〕が汚し、まったく駄目にしてしまひ、搬出する値打がなくなつていたとはいへ、もとは立派だった調度品から判断すると、また、ワイン、油、アーモンド、オリヴ、レイズン、香料、その他の良い食料品は、なるほどどこかの国〔訳者注、イギリスのこと〕の乱暴な部類の誰かにたたき割られ、目抜き通のあちこちで、足に踏みつけられてはいるが、それらの食料品が実にあり余つて多量にあることから判断すると、この町は、少なくとも最初に掠奪した者たちにとっては、どうやら非常に豊かな富をもつていたように見える。もつとも多分、最近の征服者にとっては、以前ほど役に立つ富はなくなつていたはずだ。なぜなら、町の豊かな区域が、最もひどく激しく掠奪されつくされているとみるからである。私の意見の混乱は大いに嘆かわしい。なんらかの方法でこの混乱が修復されるかもしれないと自分勝手に考えれば、それをやって下さる方がおいでならば、それはまことに立派な工夫といわなければならぬ。¹³

めぼしい財富は本当に少なかったであろうが、それでもこの報告者は相当の財富を手に入れていた筈である。そ

れを隠したいので、町が富んでいたとはいえず、さりとてまったく嘘の報告をするわけにもいかない。そのような苦しい立場が、ヘンリー・ジェイムズばりの語り口のなかに、鮮かにあらわれており、見事な「混乱」といわなければならない。旅行文学の文学性を一概に低いとみなしてはいけないのが分るであろう。さて、遠征記が掠奪のことになると口ごもる例を、今度はローリの口上にもておきたい。ここでは、なぜ口ごもるかの理由が明らかにされている。下世話が続ぎ、本筋からもそれるが、旅行文学をなるべく多くみておくというのが、本稿の副次的な目的であった。ところで、カディズ (Cádiz) はケイデイズとも発音され、英人はときにケイリーズ (Cales) と呼んだ。すなわち、――

ケイリーズの町には、交易品、皿、現金が沢山ありました。金持の商人も多数、陸軍隊長たちに捕まっております。だから例のなんとか品〔訳者注、掠奪品のこと〕は金目のものです。ある仲間は、捕虜の商人から一万六千ダカットをとって放してやり、二万ダカットとったのも、一万ダカットとったのもおりました。そのうえ、品物を邸ごとごっそりです。我々の指揮官たちが何をせしめられたかは、殆ど存知上げません。ご自分たちでは少なかつたと主張しておられます。私にとっては、ものにしたのはなんと、不自由になった片方の足と、変形してしまったもう一方の足でした。ほかになかったかと問われれば、使ってしまったか、すでに別の使途が決っているかのどちらかです。私は良いお言葉、非常にご親切で暖いご猶子を求めていたわけではありませんが、本当に、貧しさと痛み以外になにももっておりません。神様が私に弾丸をお当てにならなければ、どこかの家一軒分で、なんとか助かっていたであります¹⁴。

ただしローリが、本当に債務地獄に苦しんでいたとは思われない。掠奪品を明さないために、いかにも債務地獄に苦しんでいるように、見せかけているだけであろう。ローリも読者も、見せかけているだけなのを承知しているところから、この文章の面白が生まれている。

遠征記はこのように、掠奪については仔細を書かない。ダンはこの遠征のハイライトを、漏さずにエビグラムに書いていたが、しかし掠奪については、ハイライトの一つであるにもかかわらず、エビグラムを残していない。遠征記一般の慣例に従ったのだろう。ダンはカディズ遠征に対しては、個人的な反応を示さず、一種の公式記録員の態度で通した。掠奪について書いていないのも、そのような態度のあらわれとみられる。

その後イギリス軍は、七月一日にカディズを出港、勝利の余勢をかって、エセックス伯とローリは、アゾーアズ諸島へ転進しようと企てたが、航海の専門家ハワードの反対にあつて断念、そのまま帰途につき、八月の初めにプリマスに帰った。しかしカディズ行のあと、イギリスにとっての本当の課題は、アゾーアズ諸島ではなくてギアナだった。ギアナは、ローリが一五九五年に初めて探検し、翌年にこのときの遠征記¹⁰が出版された。ローリがカディズに遠征中、代りに派遣されたローレンス・ケイミス (Lawrence Keymis) も、カディズ遠征組が帰国した八月に、遠征記を出版した。二つの遠征記は、ローリのいうことは嘘だという、一部からでた誹謗に対する反駁だった。次に引用するケイミスの口調が激しいのは、そのような誹謗と女王の周辺の冷視が背景にある。

簡潔に申します。時が満ちました。このような千載一遇の機会は多くの時代にもめつたにありません。これまでのような慎重な思慮をいくら繰り返していても、私たちをいたずらに無気力にさせるだけです。今行かな

いと駄目です。そうしないとイギリスは豊かになりません。子孫を繁栄させられません。皇子がどこをとつても敵より強くなれません。この国を、豊かで平和な国家に定立できません。だからどうか、間違つた噂、愚かな迷信のために、こんな立派な企てをつぶしたり、こんな重大な営みであるのに眠っていたりして、その結果名誉と威力と富を逃し、これほど知れ渡っている征服の主導権を逃し、すべてをスペイン人の手に渡つたままに放置するような、こんな侮辱は、もう願ひ下げにさせていただきます。⁸⁾

このような声は、ローリと対立していた支配者層の一部は別として、一般の、ことに血氣盛んな若いジェントルマンたちの、共感をえやすかつたのではなからうか。ダンはこのような声を聞きながら、ギアナへと読者の思いを駆り立てる次のようなエピソードを書いた――

ケイリーズとギアナ

旧世界の最先端を掠奪したあと、

一度燃え立つた戦意を、新世界に向けるとすれば、

以下を正しいと証明する良い規範には事欠かないはずだ、

一つが終つて端になれば、いつも新しい端がはじまる、と。

Cales and Guyana

If you from spoyle of th'old worlds farthest end
To the new world your kindled valors bend,
What brave Examples then do prove it trew
That one things end doth still beginne a new.

英名のケイリーズを使ったのは民族意識のためである。そのケイリーズを「旧世界の先端」と呼ぶのは、遠征に成功したときに民族がいく満足感のためである。「ここで真偽を問うている (‘prove it trew’) のは、ポイント(最終行) に対してであるが、事がギアナに関わっているだけに、ギアナについてローリらがもたらした情報の真偽をも、問うている含みがある。ポイントの ‘That one things end doth still beginne a new’ には、一本の線が先へ先へと伸びてゆくさまがあり、遠征にある伸長感が一行の中に現出している。

ついでながら、ダンが一生に書いたエピグラムは、以上の三篇を含めた二〇篇にすぎない。エピグラム作者としてのダンに対して、もしエピグラムを書き続けていたら、「ダンは英語で書くエピグラム作者のなかで、簡単に第一人者になるにちがいない」(ホーンデンのウイリアム・ドラマンド) ⑩ という、同時代人の批評があった。九〇年代を代表するエピグラム作者は、サ・ジョン・デイヴィーズ (Sir John Davies) エドワード・ギルピン (Edward Guilpin) トマス・バスタード (Thomas Bastard) などである。ダンにはギルピン、バスタードと交際があったから、当時のエピグラムの傾向や水準を知りやすかった。当時の傾向は、デイヴィーズの *Nosce Teipsum*、ギルピンの *Skaletheia* が示しているように、連作による社会への諷刺であった。ダンも社会諷刺を、諷刺詩の

なかで行っており、エピグラムのなかに諷刺の要素はほとんどない。前出のドラマンドの意見は、仮定のなかに、諷刺への熱意をエピグラムで発現しているならば、とつけ加えると、より正確な意見になっていたのであろう。

本題に戻ると、カデイズ遠征について書いた作品は、確かなのは以上のエピグラム三篇だけである。もつとも、もう一つのエピグラム「城壁の崩壊」(Fall of a Wall)を、グリアンソンはこの遠征について書いたとしたが、その後異見がでて、現在まで決着がつかっていない。このエピグラムについても、参考までに簡単にふれておきたい。

下穴を堀り、銃撃で傷つけた、その城壁の

下敷になって、勇敢きわまる隊長は、不慮の死をとげた。

好運な人も羨やむ、その名譽ある不幸は、

町を掘って自分の墓となし、死体を見事に隠しおさせた。

Under an undermin'd, and shot-bruis'd wall

A too-bold Captaine perish'd by the fall,

Whose brave misfortune, happiest men envi'd,

That had a towne for tombe, his corps to hide.

城壁突破についてハクルートは、「城壁をよじ登らなければならなかった」と記すだけだが、「よじ登った」前後のイギリス軍の進撃の模様を、めざましいものだったとして記している。もし城壁を爆破し、そのとき部隊長が死んだとすれば、ダンがこの遠征のハイライトとしてとりあげたとしても不思議ではない。しかし、R・C・ボー

ルドは、ある根拠から、この事件がこの遠征のとき起ってはいなかっただろうと推定し、七年前の対スペイン、ポルトガル戦争のとき確かに起きた事件をダンが覚えていて、カディズ遠征のとき起ったようにして書いたか、それとも、その七年前の一七才のときに書いたかの、いずれかであろうと推定している。ポールドは後者である可能性をほめかしているが、前者の可能性もあるだろう。前者だとすれば、ダンがこの遠征についてエピグラムを書いたときの愛国的な意図が浮び上ってくる。勝ち戦さのハイライトは残らずとり上げようという意図、態度のことである。しかし、そのような意図、態度が、ダンの心の奥深い部分にあった欲求から生まれたものだったかどうかは、また別の問題である。

カディズ遠征をめぐるエピグラムが、三つであるにせよ四つであるにせよ、これだけ少ないのはなぜであろうか。エピグラムしか書かなかつたのはなぜだろうか。それは、カディズ遠征でのダンの経験に、負の作用を及ぼす挫折がなかったからのように思われる。カディズ遠征は、規模は小さかったが成功をもたらせていた。もともとエピグラムは、一般に受け容れられている物の見方のうえに立って書かれる。ダンの三つ、または四つのエピグラムはいずれも、一般がいただいていた成功感、満足感を反映するように書かれている。それらの題材が、この遠征のハイライトを的確に選んでいるのも、そのことと関係がある。エピグラムはその反面、例えばギルピンの *Skalkheia* のような大作は別として、個人的な告白を表現するための媒材ではない。ダンがこの遠征をめぐる、エピグラム以外の作品を書いていないのは、告白すべき体験がなかったからであろう。たとえあっても、読者がダンと共通する心情をこの遠征に対して持っていなかったからであろう。ダンの一生を見渡してみると、ダンという人間にとって、告白すべき体験は挫折以外になかった。ダンはずでに、それを告白してゆける段階に達しはじめていたが、成功だったカディズ遠征は、ダンの本当の題材ではなかったのである。

しかしアゾーアズ諸島遠征は、本当の題材になった。その遠征が、失敗と挫折の連続だったからである。

二、アゾーアズ諸島遠征と書簡詩三篇

この遠征をめぐる遠征記には二篇がある。一つは総指揮官エセックス伯によるものである^①。よるものといっても直筆ではなく、エセックスがその目的で帯同したロウジャ・マーベク (Dr Roger Marbecke) なる人物の記録に基き、エセックスがなんらかの方法で校閲したのである。マーベクの記録は後に編者ハクルートが短縮したとみられている^②。ハクルート編は短いが、ハクルートの方針はパーチャスに較べるとはるかにオリジナルに忠実だったから、オリジナルそのものもさほどに長いものだったとは考えられない。この「報告」(relation) は、文末にエセックス、ハワード、ローリなどの署名があることから分るように、一種の公式記録であった。全篇に、諸行動が目的を達しなかったのはやむをえない情況によるものだったという、釈明の姿勢がみられる。他の一篇は、女王所有船の船長だったゴージズ (Gorges) が書いた^③。タイトルに「長い報告」(larger relation) とあるように、エセックス伯によるものより十倍ほど長く、諸事件が詳しく記述されている。しかし、ゴージズはローリの部下だったので、主にエセックスへの批判が隨所にみられる。諸行動の失敗が、指揮官たちの間の緊張と亀裂を深め、それがまた新しい失敗を招いてゆく過程が生々しく描かれている。

カディズ遠征の年が明けると直ぐ、再び対スペイン行動が計画された。しかし目的地や順序で意見はまとまらず、最初にビスケイ湾のフェロウル (Ferrol) に向ったのも、確かな合意と成算があったわけではなかった。この混乱は、エセックス伯による遠征記の、次のような冒頭部分にも反映されていよう――

総指揮官エセックス閣下には、女王陛下のご愛顧をえて、女王の船団と軍隊を指揮され、一五九七年六月プーマス港を出港され、私に次のような展望を約束され、女王陛下にも期待をいだかせた。すなわち、エセックス伯は、アデランテイドウ艦隊 (the Adelantado) に率られるスペイン王の船団を、もし海上であえれば、撃退させることができよう、あるいは、もしそこに発見できれば、フェロウル港で撃滅できるであろう、と。また、交易船団か、東あるいは西インド諸島行船団を捕獲するには、「それらの船団が」スペインに帰る途中の海上で、発見できるであろう、と。最後に、ターシー (Terceira) を占領するであろう、この作戦はほかと同じほどに重要である、と。⁵⁾

多くの仮定に頼っているこの作戦計画は、この遠征の結果を予測させていた。しかし、とにかく断行する決定が五月になされると、前年の成功に刺激されて、応募者数はジェントルマンが五百をこえ、プロの兵士は六千に及んだ。ダンの応募は前年の経験があったのでたやすく受理されたのだろう。しかし、多数を運ぶ船が直ぐには揃わず、指揮官の一人ローリまでが遅れ、七月八日に出港するまで約二ヶ月間、一行は港で待機を余儀なくされた。そのときに広まった苛立ちについて、ダンの書簡詩「時化」の初めの部分が、

船団は、港で貴重な時間を浪費し、払込金が届かないだけのために

まだ出所が叶わず、寝てばかりいる囚人のように瘦せ衰えてゆきました…

How in the port, our fleet deare time did leese,

Withering like prisoners, which lye but for fees,

と書いている。最初からケチがついた遠征だったが、出港後まもなく、今度は猛烈な時化に襲われて、大部分の船団は一週間後に、とにかくたどりつける近くの港に戻る破目になった。

ダンはこのときの時化をもとにして書簡詩「時化」を書き、これが「凧」とともに初期の代表作の一つになった。本稿の「序」でふれておいたように、若いジェントルマンの参加者は、人がとりあげないような題材を拡大して書くのが許容され、また自分について、自分の見方について、書くのが許容されていた。ダンの「時化」と「凧」の性質は、このような許容の延長線上にあり、またそれで性質のすべてが説明できる。そのような性質を実証するために、まず、他の遠征記にみられるこのときの時化の記述を、作品「時化」と比較しておきたい。

エセックス伯の遠征記は、時化の様様については、ただ、

非常に激しい時化と逆風が我々を見舞ったとき、その間をかくぐくってつき進んだが船団は散り散りになり、多くの船が深刻な状態になった。^⑥

とだけ記し、あとは、「総指揮官閣下は、ご自分が直ちに後退なされると、総指揮官の船が欠けるだけでなく、遠征そのものを確実に失敗させると判断されて」、船体の水漏れと戦い、二本のマストの亀裂に耐えて、できがかり前進しようとしたが、しかし遂に、と、時化の描写よりも、総指揮としての対処のし方に、記述の重点が向けられている。一方、より詳しく記述しているゴージズは、

…突然、激しい、まるで嵐のような時化がまともに正面から我々を襲い、四日も続いた烈風のために、どの

船もやむなく自分の船の安全のことだけで精一杯になり、帆を下げて波にあい対していたが、その後なんとか吹きまくる風をきりぬけて、ひとまず寄り集まるか、それとも指示に従って集合場所に向おうとしていた。この頃になってやっと、少しでも水を吸った荷物を満載した船や、重い大砲を積みこんだ船が、高い怒濤にもまれるときの不都合と危険を身に泌みて感じはじめていた。また、船体の構造が弱い船、部品が腐っている船が蒙る損害をまのあたりにみて、憂慮しはじめてもいた。⑦

ここでも時化の描写そのものは少なく、他の船の状態に関心が向けられている。原文では、*'some'* が「危険を身に泌みて感じはじめていた」、*'others'* が「憂慮しはじめていた」とあり、*'some'* と *'others'* は船長の類であろう。筆者ゴージズも船長の一人だった。エセックス伯の場合と同じように、筆者の任務から生じる関心が、時化そのものを描写しようとする関心よりも上まわっている。以上の二例とはちがって、時化そのものを描写している例を、別の遠征記のなかに求めてみよう。カンバーランド (Cumberland) 伯は、一五八九年、ダンよりも八年前に、同じアゾーアズ諸島に向った。そのときの遠征記のなかで「一番注目に価するのは、時化をドラマティックに描いているところ」⑧とみなされている——

主帆はヤードから吹きちぎられ、甲板を舞い、海の遠くに落ちて、回収できなかった。ほかの帆も、裂けたり吹きとんだり（端から端までもってゆかれたものもあった）で、風穴がない完全な帆は殆どなかった。怒り狂う波と泡立つうねりが、次から次へと、山がいくつも来るように、ローリングしながら押し寄せ、大河が船の上を流れるように、船上のガラクタをもっていった。船は晴れたときには水面から二〇フィートの高さを

維持していたが、「今は、」かつての気高い詩人預言者と一緒に、私も次のような『詩篇、一〇七篇二六節』を大声で唱えたかった。彼等は天にのぼりまた淵（海溝）にくんだり、患難によってその靈魂はとけさった。彼等はこなたかなたに傾き、酔いたる者のごとく踉蹌（よろよろ）ひて、所を知らず、と。この極限の悪天候によって、船は抛られ、たたかれ、きしむ音、水漏れは普段とはちがい、この船は激震のためにバラバラになりはしないかと、我々は非常に不安だった。¹²

古くから文学は人生を旅に喩えてきた。『詩篇』も、患難に翻弄される人の姿を、時化で木の葉のように上下する船に喩えた。しかしゴージズは逆に、上下する船を、患難のなかでゆれる人に喩えている。いいかえれば、旅を喩えに利用した『詩篇』を逆用して、あくまでも旅そのものを描こうとしている。これは描写に就く意志が強いのを物語っている。もっともこの描写には、あまりに上下の揺れが大きいので『詩篇』の表現を思いだしたというような、人の反応が含まれている。しかし、怖がる人の反応は、時化の景を構成し、時化の描写の対象のなかに含まれている。以上の三つの記述を念頭におきながらダン（Christopher Brooke）の書簡詩「時化」に向うと、この作品の性格が鮮明になる。以下は作品解釈である。

「時化」は法学院でえた親友クリストファ・ブルック（Christopher Brooke）に宛てられた。法学院からは多数が遠征に参加したが、ブルックは院に残っていた。この作品は友に宛てた旅の「報告」という枠組をもっている。ダン（Christopher Brooke）は次のように報告しはじめた——風は、港で待機して腐っていた我々には、まるで「食べ物が入らず、両側がひつついてしまった胃に、食べ物が入った」ように、有難かったが、それも一日だけで、風はやがて「突風」に、「時化」に、「嵐」とかわり、「船酔い」が激しくて眠るしかなかった。しかし、

目覚めてみると、見たこともない光景がありました。

私のみならず、私に区別を教えなければならぬ太陽までが、東と西、昼と夜の区別を忘れていました。

これでこの世が終ったのだろう、万一そうでなかったときだけ、今は昼の筈でした。

But when I wakt, I saw, that I saw not;

I, and the Sunne, which should teach mee had forgot

East, West, Day, Night, and I could but say,

If the world had lasted, now it had beene day.

昼の筈なのにこの暗さでは、きつとこれが最後の審判にちがいない、とダンは思った。

…棺の船室に入っている連中はみな、まだ死ねないので悲しみ、

さりとて死ぬのも怖いとまた悲しんでいます。

罪を背負った霊が、審判の日に墓に帰って外をのぞきみるように、

船室からこわごわのぞいている者もいます。

震えながら、どんな様子かと尋ねると、聞かされた答えは、

妻を疑う亭主と同じ、知りたくなかった真実です。

• • •
Some coffin'd in their cabbins lye, 'equally
Griev'd that they are not dead, and yet must dye;
And as sin-burd'ned soules from graves will creepe,
At the last day, some forth their cabbins peepe:
And tremblingly'aske what newes, and doe heare so,
Like jealous husbands, what they would not know.

ダン は 後 年 の 宗 教 詩 と 説 教 で、 最 後 の 審 判 の 日 を よ く 思 い う か べ た。 そ の と き に 人 が 裁 か れ る の を 思 い う か べ て、
今 の う ち に 罪 を 悔 い よ と 人 に 説 い た の だ っ た。 罪 を 悔 い さ せ る 意 図 が な い の を 除 け ば、 こ こ は 後 年 の 宗 教 文 学 の
舞 台 そ の も の で あ る。

ハッチに出ている連中には目的がありました。

一層恐ろしい光景を見つめることで、己れの恐怖心をやわらげているようでした。
彼等が見たのは船の病でした。マストは

瘡^{ぢり}で震え、船倉と甲板底部は

水腫病で動けません。索具が音をたてて

骨折するさまは、張りすぎた弦が、高音を出して切れるようです。

Some sitting on the hatches, would seeme there,
With hideous gazing to feare away feare.
There note they the ships sicknesses, the Mast
Shak'd with this ague, and the Hold and West
With a salt dropsie clog'd, and all our tacklings
Snapping, like too-high-stretched treble strings.

ダンは宗教文学で、罪を負っている人間を病人に喩えた。罪の病を癒すには、自分の病が一層重いと自覚する方法を勧めた。この方法は、毒によって毒を制するという、パラケルサスの医療法に拠っていた。筆者はその医療法が、ダンの宗教文学を統一する原理になるのではないかと理解している。⁴³「船の病」は、この部分の三行目からはじまっているが、最初の二行の「恐怖」を病とすることもでき、恐怖を癒やすにはより大きい恐怖をもってするというパラケルサスの医療法を、ここに認めることができる。総じていえば、この部分は、ダンの宗教文学と同じエトス、同じバトスによっていると思われる。

破れた帆から、帆布がちぎれて垂れ下っているさまは、
鎖でぶらさげられ、一年間晒された刑死人から、ぼろが垂れているようでした。

And from our totter'd sailes, ragges drop downe so,
As from one hang'd in chaines, a yeare agoe.

いかにもルネッサンスの詩らしいこの個所は、船を今度は罪人にみたてている。晒されている死体から垂れている「ほろ」とは、風化した衣類であると同時に、風化した肉体を意味している。刑死人の肉体に、霊は戻ってこず、肉体の再生はない。ダンはどこで楽しみながらも、恐ろしいことを述べている。しかもこの死体は、風にもまれて激しくあたりにたたきつけられている。

われわれを守るようにと備えつけられた艦砲でさえ、

台座をはずして逃亡しようとしています。

海水のかい出しで皆疲れはてましたが、はたして効果があるのでしょうか？

水びたしの上にもたまた水がくるので、かい出しても吸いこんでいるようなものです。

水兵は命令に耳をかして、耳が聞こえなくなりました。

それでもまだ聞こえる者も、今度は言葉が出ません。

この嵐に較べると、死は吐き気にすぎません。

地獄もまだ楽です。バーミューダ海もまだ静かです。

Even our Ordinance plac'd for our defence,

Strive to breake loose, and scape away from thence.

Pumping hath tir'd our men, and what's the gaine?

Seas into seas throwne, we suck in againe;

Hearing hath deaf'd our saylers; and if they

Knew how to heare, there's none knowes what to say.
Compar'd to these stormes, death is but a qualme,
Hell somewhat lightsome, and the Bermuda calme.

この歌では、地獄のありようにならって、絵巻物のように同じことが繰り返されている。時化のときの闇も次のようにまた繰り返されるが、分らぬように書き出しの闇に対応させていて、このようにむすびの部分を作りあげている――

光の兄貴である闇は、長子権を主張して、

この世を治め、光を天に追いやりました。

万物は闇のなかで一つになりましたが、その一つに形がありません。

なぜなら、あらゆる形相を、同じ奇形が包みこんで統一しているからです。

神が再び「光あれ」とのたまわなければ、

光はあらわれないであります。

怒り狂う時化は、このように激しく、いつまでも終らないので、

貴君の不在はせつないけれども、ここにいてくれるのを望みません。

Darkesse, lights elder brother, his birth-right
Claims o'r this world, and to heaven hath chas'd light.

All things are one, and that one none can be,
Since all formes, uniforme deformity
Doth cover, so that wee, except God say
Another *Fiat*, shall have no more day.
So violent, yet long these furies bee,
That though thine absence sterve me, I wish not thee.

この遠征にとつてこの時化がもつていた意味は、エセックスとゴージズの遠征記がとりあげた程度の、旅の一駒にすぎなかった。しかしダンはその一駒をこのように「拡大」した。そして時化についての「自分の見方」を示した。時化はダンが作り上げたものである。なるほど時化の有様は、船にいる仲間が見たものとして語られている。しかし、この詩のなかの人間は、カンバーランド伯の遠征記のなかの、時化のなかにいる人間のようには、時化の一部になってはいない。彼等はダンが作った操り人形である。彼等はダンに操られて、時化をダンが見るまに作らされている。だからこの詩は、時化についてではなく、自分自身について書かれている。若いジェントルマンには、遠征報告を「自分について」書くのが許されていたのだった。にもかかわらずこの作品は、ある段階まで、時化を描写したリアリズムの詩とみなされていた。しかしようやくその見方が修正されたのは、一九六四年のことであった。B・F・ネリスト(Neliss)によると、文学の伝統のなかでは、時化だけでなく海そのものが、現世蔑視に至る敗北の舞台となってきた。そのような伝統は、ホーマー、オーヴィッド、セネカに遡れ、ダンのこの作品もこの伝統のなかにある。当時のエンブレムに、順風で帆を張る豪華船が、時化にあってたちまち難破するさまを描いた一組があり、ダンのこの作品も、モラルをかかげるエンブレムに通じるものがある、と。

しかし、ネリスト自身もいつているように、ダンはこの作品でこの伝統を極限まで押し進めている。いいかえれば、伝統から離脱した部分に、作品の本質が含まれていると思われる。筆者はこの作品を、その伝統から離脱すること甚しい、ダンの宗教文学に、近いと理解する。この作品の特徴は、ダンが船と人に悲慘をみるこだわりであろう。極限の悲慘に真実をみようとすることだわりである。ダンは、かくも悲慘とみる一種の誇張と、常識との間にある落差を、心の奥では知っていたにちがいない。しかしダンは、その落差には心を向けず、このような見方と、このような見方をする自己とを、恒常とみなし、見方と自己とを定立しようとしている。グリーンブラット (Greenblatt) 流にいえば、そのような「自己」(self)を「形成」(fashioning)しようとしている。ダンはこの作品から一〇年後には聖職者になって、自分の悲慘、世界の悲慘が極限に及んでいると説きつづけることになる。この作品の世界とダンが終着した宗教文学の世界とは、きわめて近いとみななければならない。

遠征の経過に戻りたい。ダンの船団は、後に見るダンの手紙に、一度は「行く先のスペインの地が見えた」とあることから、結局時化をのりきって、スペイン領コラナ (Coruna) 沖に達したらしい。しかし僚船の後続なく、この船団も八月八日か九日にプリマスに帰ることになる。破損した諸船が修理されて再出港したのは八月一五日、先に早々と帰港していたエセックス、ローリーの船団にとっては、一ヶ月余りの浪費であった。待機の頃の虚脱について、ゴージズはこう述べている――

この激しく危険な嵐は、多くの若いジェントルマンたちの勇気を冷やし、砕いてしまった。(彼等は猛烈な風と無慈悲な海が、ロンドンの雅、宮廷の華と合わないのが分った。) その結果、せっかくの高い羽毛帽子と

刺繍入りの半コートを脱ぎすて、秘かに郷里に帰ってしまった^⑧。

待機のあいだ口代は自費で賄わなければならなかった。このとき乗員たちが味わった困窮を、残っているものとしては最古のダンの手紙^⑨は次のように描きだしている。――

ひどい物乞いがこれほど堂々と行われたのは、役者の一座が金庫をなくしたとき以外にはありませんでした。……とても派手な衣裳を除けば（それもひどく汚れていましたが）、私たちはユートピアにいたと思います。なぜなら、全員がまったくの不如意、あからさまな柄の悪い言葉でいえば、金欠（want）は全員のもので（general）、大将閣下（general）もまた金欠であられた。それに、大将閣下は、今日に至るまで行方不明（wanted）であられた。「訳者注、エセックス伯はロンドンで女王と会っていた。」

... never was extreme beggary so extremely braue except when a company of mimers had lost their box.
... but for ye much gay clothes (wth yet are much melted) I should thinke wee were in vtopia: all are so vtterly coyneles. in one bad bare word ye want is so generall that ye lo: generall wants & till this day wee wanted ye lo: generall:

このときの困惑を、総指揮官が行方不明になったときの困惑とまでみているが、この思念の動きは、時化のときの恐怖を最後の審判のときの恐怖とみなしたのと同じである。この冗談のなかにも、ダンの思念のパターンが読みとれる。船団が再出港したとき、六千の陸兵は一千人に減っていた。ビスケイ湾でまた時化にあい、船団は二

手に分断、最初の目標だったフェロウル港には、スペイン艦隊の影はなかった。その頃ローリからエセックスのもとに、敵艦隊はフェロウルを去ってアゾーアズ諸島の一つターシイ島に集結中という偽報がもたらされた。エセックスが島に先着すると、艦隊の姿はなく、諸島の一つフロウリス(Flores)島沖でローリを待った。そこに急ぐローリの船団は、風に入ってしまった。ダンが航行不能となった。ダンの書簡詩「風」は、このときの体験を述べている。⁹⁾

エセックス伯の遠征記はこのときの風にはふれていない。ライヴァルのローリが遅れた理由をあげてわざわざローリをかばう必要がなかったからだろう。しかしローリの部下だったゴージズ船長は、ローリの船団についてこのときの風にあつていた。ゴージズによると、船団はすでに諸島にさしかかり、島蔭に船団を見つけにくいのを案じながら、エセックスが待つフロウリス島沖に向つていた――

まだセント・ジョージズ島にさしかからないうちに、一日か二日の間、ひどい風に入った。気温も非常に暑かった。風のために風が帆をマストから離すこともできなかった。我々はやむなく海上で停止してしまい、大いに不満であった。なにしろ我々はそれまで、総指揮官と他の船団に早く出あおうと、倦まず弛まず努めていたのだったから。¹⁰⁾

そういう事情があつただけに、一行にとってこのときの風は、普通の航海者が感じる以上にもどかしく感じられた。ここにダンの出発点があつたらう。そういう事情のなかにあつて、ゴージズは風に対して「大いに不満だった」とだけ述べ、平常心をこえていない。この引用の直後では、彼等が出会った夜の虹をギリシア人がどうみた

かについて、想いをめぐらす余裕があった。しかしダンは、この風をゴージズのように平静には受けとめなかった。以下は書簡詩「風」に対する作品解釈である。

…動ければ探せていた、あのめざす諸島のように、

諸船はみんなどっしり根をはってしまいました。

時化のときには海水が流れ落ちたのに、今はビッチが流れ落ちて、

炎上した教会に、鉛の縦樋が残るのを思わせます。

• • •

〔中央の〕白兵戦場では、ボロを着た船乗りたちが寝ころんでおり、
索具はどれも古着屋と化しています。

And, as those lies which wee

Seeke, when wee can move, our ships rooted bee.

As water did in stormes, now pitch runs out,

As lead, when a fir'd Church becomes one spout.

• • •

The fighting place now seamens ragges supply;

And all the tackling is a frippery.

この船は灼熱でロンドンの教会のように炎上しかねない。船乗りたちが着ている「ボロ」は、ここでも彼等の汚れた肉体のことでもある。いま肉体が寝ころんでいる船体中央部は、本来は敵兵の死体が横たわっているべきところである。船乗りの肉体をみていると死体を思い出したのだろう。索具にかけられている古着には、晒されている死体のイメージがある。このあと、いずれも不吉な比喩を使って、風の空間を「地球の空洞」(Barth's hollowness)に喩え、動けない船の姿を「ほうき星」(meteor)に喩え、死のイメージが重ねられたあと、さらに、離れた仲間と再会するには、船員病に罹る以外にありません。

〔海を陸地と思って飛びこめば〕 出会うところは巨魚の顎のなかです。

ハッチにも寝ていますが、そこは祭壇で、

自分が神父と供物になっています。

それでもまだ生きているのは、灼々とした窯を歩いても

死なないという奇蹟を、我が身で証明してからのつもりです。

• • •

Only the Calenture together draws

Deare friends, which meet dead in great fishes jaws:

And on the hatches as on Altars lyes

Each one, his owne Priest, and owne Sacrifice.

Who live, that miracle do multiply

Where walkers in hot Ovens, doe not dye.

魚の頸の中で出会うというところは、ダンの諷刺詩とエレジーを思わせて快活である。ミサと奇蹟を行なっているというところは、一見嚴肅にみえるかも知れない。しかし前者がふざけていて後者が真剣であるわけではない。いずれも奇を衒っていて、才智で読者を楽しませようとしているのにかわりはない。このような部分は、この詩が宛てられた親友ブルックや、秀才ぞろいの法学院や航海仲間読者を喜ばせようとして書かれている。しかし、このあと直ぐに続いている失意の部分は、このような才智の産物ではない。この失意の部分はすでに引用したことがある^①——この遠征は、腐った国家にも職を求めるためだったか、それとも恋の苦しみから逃れるためだったか、…一番の動機がなにであつたにせよ、この風でどの目的も果せなかつた、と。このような真摯なトーンはダンの「self-respect」が作りあげる、とミルゲイトはいつている。ミルゲイトはさらにいう、「トーンの変化に鋭く応じられ、真摯と軽薄とを聞き分けられ、真摯な思想や感情と、機智に豊んだユーモラスな精神の働きとを聞き分けられる正しい耳を持った読者が、ダンの書簡詩を、…「本当の意味で」楽しむことができる。」^②以下のような「風」の結びは、このような楽しみを満喫させてくれるではないか。——

…私も死にたいやら死にたくないやらですが、

戦死を嫌わぬ勇者がここでは死ねず、嫌う臆病者がここで死んでしまいます。

雄鹿と猟犬にかぎらず、逃げる者、とびかかる者のいずれもが、

餌食になるか先に動くかで、対価に命をさし出して死んでゆかねばなりません。運命は人すべてに冷酷で、巧妙に災難をふりかけます。

にもかかわらず人は、神に助けを祈るのを忘れはてています。

ところが、海で嵐を乞い願うのは、

極地で寒気を、地獄で熱気を乞い願うのと同じです。

それでは人間とは一体なんなのでしょう？

過去の時代に較べて、はたしてどれだけ偉くなっているのでしょうか？

人は昔、無でありました。今日の我々も、将に無であると判断されます。

なぜなら、偶然にふりかかる好運か、罪深い利己心かが、人の心を歪めています。

その結果今の人間には、意志も、力も、感覚もありません。そうです、私は嘘をついてきました。

この悲惨を、これまで書いてきたように、感じとってはいけなかったのです。

... for here as well as I

A desperate may live, and a coward die.

Stagger, dogge, and all which from, or towards flies,

Is paid with life, or pray, or doing dyes.

Fate grudges us all, and doth subtly lay

A scourge, 'gainst which wee all forget to pray;

He that at sea prays for more winde, as well

Under the poles may begge cold, heat in hell.

What are wee then? How little more alas
Is man now, then before he was? he was
Nothing; for us, wee are for nothing fit.
Chance, or our selves still disproportion it.
Wee have no will, no power, no sense; I lye,
I should not then thus feele this miserie.

風のなかではそこに留まるのも死、そこから動きだそうとするのも死をもたらず。これをいうのに、にらみあつたままで動けない雄鹿と狩犬をもちだす部分は面白い。また、海で嵐を乞い願うことの愚をいうのに極地と地獄をもちだす部分も面白い。このような部分はいわば刺身の妻である。妻が刺身をうまくするのがダンの文学である。人間とはなにか？ 今も昔も無ではないのか？ このような刺身の部分にはダンの「self-respect」がこめられている。「偶然にふりかかる好運」は、「腐った国家のもと、しかもそこにポストをもくろんだ」とある部分に照応している。「利己心」はもとから人に巢食っている罪である。人は外からふりかかる「好運」と、内に巢食う「利己心」によって、調和ある存在を歪めている。その結果、調和を求める「意志」も「力」も「感覚」もなくなっている、それが人間なのだ、と。このような問いかけ、このような表白を、ダンは一生涯にわたって自分が選びとった役割にしてゆく。急いでいたダンの船団にとって、このときの風はとりわけ苛立たしかった。この特殊な状況から出発して、ダンはこのような根本的な問い、このような表白に到達した。この意味で「時化」と「風」は、ルネッサンスの機会詩(occasional poetry)に属している。そして、二つの書簡詩にダンが自分を投入できたのは、諸島遠征という機会がたまたま失敗と挫折の機会だったからであった。

諸島遠征をめぐるもう一つの書簡詩「R・W氏に」がある。遠征の順序からは前後するが、トーン我真摯をめぐる、ここでとりあげておきたい。ミルゲイトは「自負心」(self-respect)がもっているかどうかの判定基準を、トーンに求めているが、その基準を、詩の構成、あるいは様式に求めなければならない場合がある。

「R・W氏に」がその場合である。

ダンが時化のあとプリマスで待機しているあいだに、エセックス伯とローリはロンドンに上京し、エリザベス女王にフェロウル攻撃を中止し、金鉱の地ギアナの周辺、すなわち南アメリカ北東部に向うように進言していた。しかし優柔不断だった女王は進言を容れず、大方がいただいた失望は大きかった。「R・W氏に」はこの失望のなかで書かれた。R・Wは法学院でえた友人 Rowland Woodward である。この作品は作者と読者のあいだの、遠征についての事情を前提にして書かれている、いわば内輪の詩であるので、訳文のなかに原文にない説明を織りこんで理解を計っておいた――

• • •

あらゆるニュースは、私よりもロンドンにおられる貴台に早く伝わっていると思えますが、

ギアナの港は天国ですから、そこに入るイギリス船はさしづめ翼をもった天使になりましょう。

その船はギアナに、スペインのように苛酷な脅しだけでなく、福音をもたらせます。

であるのにギアナの産物は、まだ春のうちにつみとられている懸念があります。

(思うに、)運命がイギリスにしている商取引は、

神様がユダヤの案内人になされた取引と同じです。

ユダヤ人に豊かな土地をお見せになっただけで、入植を禁じられました。

だから、イギリスが遅れをとらされているのは、イギリスが罪を犯し、それを神様が罰せられたからでしょう。月と太陽の中に入った地球が、ギアナがくれる光を今はさえぎっているもの、やむなく断たれている希望は、そのうちきっと再生されるであります。

しかし、(全宇宙と同じように、)希望はいずれ必ず燃え尽きるものとすれば、無尽の徳こそ、富を生みだす土地ではないでしょうか。

もし人間が全世界の縮小であれば、誰の身体の中にも、

全世界の富になんらかの比率で照応している部分があることになる。

信仰篤き人にあるは、徳、すなわち

人間の形相のなかの形相、魂のなかの魂、その徳こそが、その部分に該当する。

• • •

All newes I think sooner reach thee then mee;

Havens are Heavens, and Ships wing'd Angels be,

The which both Gospel, and sterne threatnings bring;

Guyanaes harvest is nip'd in the spring,

I feare; And with us (me thinkes) Fate deales so

As with the Jewes guide God did; he did show

Him the rich land, but bar'd his entry in:

Oh, slownes is our punishment and sinne,
 Perchance, these Spanish businesse being done,
 Which as the Earth betweene the Moone and Sun
 Eclipse the light which Guyana would give,
 Our discontinu'd hopes we shall retrieve:
 But if (as all th'All must) hopes smoake away,
 Is not Almighty Vertue'an India?

If men be worlds, there is in every one
 Some thing to'answere in some proportion
 All the worlds riches: And in good men, this,
 Vertue, our formes forme and our soules soule, is.

ギアナへの遠征を見送るといふ女王の決定に、不満を残しながらも忠実であろうとしている。さて、この詩の構成をみると、結びの四行は独立したエピグラムとみることができ、エピグラムは、時に反価値を主張するために逆用されることもあるが、本来は普遍的な真理を語るためのジャンルである。この詩は、エピグラムというジャンルがもっているそのような前提を借りて、徳につけという勧めに力をあたえている。なお、一般に結びが効果をあげるには、前の部分で一度歌が完結している場合もあるし、していない場合もある。この詩はいずれにも読むことができる。一度前で完結していると読むとき、「しかし…希望も燃え尽きるものだとすれば…」という二行は、同時代のソネットとエピグラムを念頭におくと、決して結びとして不十分でも唐突でもない。それはそれとして、この詩では、エピグラムという様式を用いたところに、ダンの自負心がこめられている。ついでなが

ら、ジョージ・ハーバートもまた、様式の力を借りて本心を表現した。ハーバートに似ている点をつけ加えると、ギアナ行をうながしている箇所は、否定されるためにあるものの、その箇所も生きている。この点でもこの詩は、ハーバートの詩に受け継がれるとみることができる。なお、「R・W氏に」がもっている意味は、「時化」と「風」のあとにダンが辿った、宗教者への軌跡を描いてみせているところにあるのはいうまでもない。

ダンの遠征のあとを辿っていた我々の長い旅も終りに近づいた。ダンの船団は、風で遅れたあととやっとエセックス伯たちの船団と再会したが、イギリス艦隊は、西インド帰りのスペイン交易船団はいずれ諸島を通過するとみて、また分散して待ちぶせの布陣をしいた。しかし大船団は網の目をくぐってターシィ島に入港してしまった。ここへの攻撃を諦らめたイギリス軍は、諸島の一つファイアール (Fayal) に集まったが、先に到着していたローリが、エセックス伯の許可を待たずに上陸して町を襲ったために、二将の間に亀裂が深まり、その修復でてまどるうちに、町の財富は持ち出されて掠奪は成功せず、ゴージズの諭えによると、「みすみす小鳥を鳥かごから逃す」³⁸ ようなものだったという。イギリス艦隊はこのあとプリマスに帰港するまで、各地に寄っているが、見るべき戦果はなく、ゴージズの記述にも苛立ちが高まっている。

ダンにはカディズ遠征の成功のなかではなく、諸島遠征の失敗のなかに、人間の普遍的なありようを見た。ところで、この時代の遠征をめぐるのは、栄光よりも悲惨の記録に対して、近年の関心が集まっている。ダンの挫折も、このような関心の対象になりうるであろう。初期のグリーンブラットがこの時代の旅行文学に関心をいだいたのは、悲劇に終わった実人物（ローリ、トマス・モア）や、芝居の主人公の行動のパターンが、遠征記のなかにも見出せるからであった。³⁹ 一方、演劇研究から出発して旅行文学研究に及んだフィリップ・エドワーズは、悲劇

に至った遠征者たちの行動が、同時代の芝居の主人公の行動に似ていると見ている。グリーンブラットとエドワーズは、道筋はちがっても同じ結論に達している。すなわち、遠征での挫折経験は、実人物や芝居の主人公の真の意味での本質に関わっていた。それはダンの場合も同じであった。ダンも旅の挫折から、文学者としてまた宗教者としての、一生にわたるあり方をすでに定立したのであった。この論文はこのように、ダンの遠征経験がもっていた意味を従来よりも重く見ようとするものである。この見方は、遠征での挫折経験を重視する近年の傾向と合致し、ダンの側から、グリーンブラットとエドワーズの見方を支持する格好になっている。

ちなみに、ダンの挫折は、筆者にはあらかじめ予定されていたように思える。悲劇を招いた航海者たち、キャヴェンディッシュ (Cavendish)、ハドソン (Hudson)、ローリたちは、悲劇を予測しながらもなにものかに導かれるようにして航海にでた。芝居の主人公たちも、あらかじめ定められていた道筋を辿って悲劇を完結していった。ダンの一生を眺めると、ダンの旅もこれらの人々の旅に似ているように筆者には感じられる。

注

序

① 中国をめざしたハドソンはハンリ・グリーン (Henry Green) を、北廻りで極東をめざしたジョン・デイヴィーズはジョン・ジェイン (John Jane) を、またローリは有名な科学者トマス・ハリオット (Thomas Harriot) を、それぞれ同道させた。

② Cf. Albrecht Meier, *Certain briefe, and speciall instructions for gentlemen, merchants, students, soldiers, mariners, etc.* (1989) and Robert Boyle, 'General Heads for a Natural History of a Countrey, Great or Small', in *Transactions of the Royal Society* (1666), I, p. 186.

④ R. C. Bald, *John Donne, A Life* (Oxford at the Clarendon Press, 1970), p. 80.

⑤ Helen Gardner, 'he shows the common Elizabethan pride in English ways and the common contempt for foreign' and 'how markedly he echoes "official policy"', in *John Donne, The Elegies and The Songs and Sonnets* (Oxford at the Clarendon Press, 1965), pp. 114, 129.

⑥ Edwards, II, pp. 152-3.

⑦ Edwards, II, p. 153:

The spectacle was very lamentable on their side; for many drowned themselves; many, half burnt, leapt into the water; very many hanging by the ropes' ends by the ships' side, under the water even to the lips; many swimming with grievous wounds, stricken under water, and put out of their pain; and withal so huge a fire, and such tearing of the ordnance in the great *Phillip*, and the rest, when the fire came to them, as, if any man had a desire to see Hell itself, it was there most lively figured.

⑧ Hakluyt, vol. IV, p. 248:

...about which time the Phillip, whom in very truth, they had all most fancie unto, began to yeeld and give over, her men that remained alive shifting for themselves as they were able, and swimming and running a shoare with all the hast that they could possibly, & therewithall, at the very same instant themselves fired their ship, and so left her, & presently thereupon a great Argosie, with an other mighty great ship, fired themselves in ye like manner.

⑨ Hakluyt, vol. IV, pp. 252, 258-59:

...where and at what time, that worthy famous knight Sir John Winkfield, being sore wounded before on the thigh, at the very entry of the towne, and yet for all that no whit respecting himselfe, being carried away with the care he had to encourage and direct his company, was with the shot of a musket in the head most unfortunately slaine. ...

Upon Saturday being the 26. Sir John Winkfield knight was buried, in honourable and warlike manner, so farre forth as the circumstances of that time and place could permit. At whose funerals the Navie discharged a great part of their Ordinance, in such order, as was thought meete and convenient by the Lords Generals commandement.

The twenty seventh day being Sunday, in the Abbey the divine service was had, and a learned Sermon was made there by one Master Hopkins, the right honourable Earle of Essex his Preacher, a man of good learning and sweete utterance, ...

㊦ Purchas, vol. XX, pp. 14, 18.

㊧ Cf. 'Drummer Hodges'.

㊨ Cf. 'Astronomy'.

㊩ Hakluyt, vol. IV, p. 257:

Of what wealth this towne should be, I am not able to resolve the asker: for I confesse that for mine owne part, I had not so much good lucke, as to be partaker so much as of one pennie, or penny worth. Howbeit my ill fortune maketh that towne never a whit the poorer. But as it should appeare by the great pillage by the common souldiers, and some mariners too, and by the goodly furnitures, that were defaced by the baser people, and thereby utterly lost and spoyled, as not woorth the carrying away, and by the over great plenty of Wine, Oyle, Almonds, Olives, Raisins, Spices, and other rich grocery wares, that by the intemperate disorder of some of the rasher sort were knockt out, and lay trampled under feete, in every common high way, it should appeare that it was of some very mighty great wealth to the first owners, though perchance, not of any such great commoditie to the last subduers, for that I judge that the better part was most ryotously and intemperately spent and consumed. A disorder in mine opinion very much to be lamented, and if it might be by any good means remedied, in my conceit, it were a most honourable device.

㊪ Edwards, II, pp. 155-56:

The town of Cales was very rich in merchandize, in plate, and money; many rich prisoners given to the land commanders; so as that sort are very rich. Some had prisoners for sixteen thousand duccats; some for twenty thousand; some for ten thousand; and, besides, great houses of merchandize. What the Generals have gotten, I know least; they protest it is little. For my own part, I have gotten a lame leg, and a deformed. For the rest, either I spake too late, or it was otherwise resolved. I have not wanted good words, and exceeding kind and regardful usance. But I have possession of naught but poverty and pain. If God had spared me that blow, I had possess myself of some House.

- ⑮ *A Discoverie of the large, rich, and beautiful Empire of Guiana* (London, 1596, facsimile ed. of 'The English Experience' by Da Capo Press, 1968).
- ⑯ 'A Relation of the second Voyage to Guiana, performed and written in the yeere 1596. by Laurence Keyrnis Gent.', Hakluyt, vol. X, p. 491:

In one worde; The time serveth, the like occasion seldome happeneth in many ages, the former repeated considerations doe all joyntly together importune us, nowe, or never to make our selves rich, our posteritie happie, our Prince every way stronger then our enemies, and to establish our Countrey in a state flourishing and peaceable. O let not then such an indignite rest on us, as to deprave so notable an enterprise with false rumors, and vaine suppositions, to sleepe in so serious a matter, and renouncing the honour, strength, wealth, and soveraigntie of so famous a conquest, to leave all unto the Spaniard.

- ⑰ Cf. Milgate, p. 196.
- ⑱ Herbert J. C. Grierson, *The Poems of John Donne* (Oxford, 1912), II, p. 59.
- ⑲ Cf. Milgate, pp. 197-8.
- ⑳ R. C. Bald, 'The Three Metaphysical Epigrams', *Philological Quarterly*, vol. XVI (1937), pp. 402-3.
- ㉑ 一五八九年の戦争で起きたその事件を記録したサ・ジョージ・ブックは、カデイス遠征にも参加し、やはり記録を残したが、この事件は一五八九年の記録のなかだけで述べられている。
- ㉒ 『マンローブス諸島遠征と書簡詩三篇』
- ① 'The Voyage to the Iles of Azores, under the conduct of the Right Honorable Robert Earle of Essex, 1597. The Relation thereof by the said Earle and other Commissioners.', Purchas, vol. XX, pp. 24-33.
- ② Cf. Quinn, 'Contents and Sources of the Three Major Works', *The Hakluyt Handbook* (The Hakluyt Society, 1974), vol. II, pp. 382-3.
- ③ *Ibid.*

⑦ 'A larger Relation of the said Iland voyage, written by Sir Arthur Gorges knight, collected in the Queenes Ship called the Wast Spite, wherein he was then Captaine; with Marine and Martiall Discourses added according to the Occurrences,' in Purchas, vol. XX, pp. 34–129.

⑧ Purchas, vol. XX, p. 24:

The Generall, having by her Majesties gracious favour the charge of her Fleete and Armie, set out of Pimmouth in June 1597. did both promise my selfe and give hope to her Majestie, that I should be able to defeat the King of Spaines Fleete, commanded by the Adelantado, if I met them at Sea, or destroy it in the harbour of Feroll, if I found them there; as also to master and take all Fleetes of treasure, or of the East or West Indian Fleete, that I should finde upon the Sea in their way to Spaine: and lastly, that I should take in the Iland of Tercea, which I held an action of equall importance to the other.

⑨ Purchas, vol. XX, p. 24–25:

...when most extreame stormes and contrary windes met with us, we beate it up till all our Fleete was scattered, and many of our ships in desperate case.

⑩ Purchas, vol. XX, p. 42:

...there suddenly arose a ferce and tempestuous storme full in our teeth, continuing for foure dayes with so great violence, as that now every one was inforced rather to looke to his owne safetie, and with a low saile to serve the Seas, then to beat it up against the stormy winds to keepe together, or to follow the directions for the places of meeting. And here some began to taste the inconvenience and perill of high Cargued [*sic*] Ships drawing little water, and overcharged with mightie Ordnance in a furious high wrought Sea: And now also others found and felt the mischiefe of weake built Vessells, and of rotten Tackle.

⑪ 'The voiage of the right honorable Georg Erie of Cumberland to the Azores, &c. Written by the excellent Mathematician and Enginer master Edward Wright', Hakluyt, vol. VII, pp. 1–31.

⑫ George B. Parks, 'Tudor travel literature: a brief history', Quinn, *The Hakluyt Handbook*, 1, p. 116.

⑩ 該当する箇所はこの個所以外はない。

⑪ 以上が二十六節で、以下は二十七節。

⑫ Hakluyt, vol. VII, pp. 24-25.

Herewith our maine saile was torne from the yarde and blowne overboard quite away into the sea without recovery, and our other sailes so rent and torne (from side to side some of them) that hardly any of them escaped hole. The raging waves and foming surges of the sea came rowling like mountaines one after another, and overraked the waste of the shippe like a mightie river running over it, whereas in faire weather it was neere 20. foote above the water, that nowe wee might cry out with the princely Prophet Psalme 107. vers. 26. They mount up to heaven, and descend to the deepe, so that their soule melteth away for trouble: they reele too and fro, and stagger like a drunken man, and all their cunning is gone. With this extremitie of foule weather the ship was so tossed and shaken, that by the craking noise it made, and by the leaking which was now much more then ordinary, wee were in great feare it would have shaken in sunder.....

⑬ 拙論「John Donne, the Valetudinarian—ダントンのヴァレチナリスム」序(『視界』一五号)、「Curing Like by Like—ダントンのヴァレチナリスム」(『人文』一九号)、「Anticipation of Experience—ダントンのヴァレチナリスム」(『英文学叢書』三二集)。

⑭ Cf. M. F. Moloney, *John Donne: His Flight from Medievalism* (Urbana, 1944; reprinted 1965), p. 130; K. W. Gransden, *John Donne* (Longmans, 1954), p. 107.

⑮ 'Donne's "Storm" and "Calm" and the Descriptive Tradition', *MLR*, LIX (1964), pp. 511-15.

⑯ 'wee haue seenne y^e land of promise Spain'. Cf. note 18.

⑰ Purchas, vol. XX, p. 44:

But yet this violent and dangerous tempest had so cooled and battered the courages of a great many of our young Gentlemen (who seeing that the boysterous winds and mercesse Seas, had neither affinitie with London delicacie, nor Court bravery) as that discharging their high Plumes, and imbroydered Cassockes, they secretly retired themselves home,....

⑲ Evelyn M. Simpson, *A Study of the Prose Works of John Donne* (Oxford at the Clarendon Press, 2nd. ed. 1948), pp. 303-4.

⑳ ⑳ ダンは最初はハワードの船団だったので、ローリーの船団に移っていたのだろう。

㉑ Purchas, vol. XX, pp. 65-6.

Whilst we were before Saint Georges, we were very much becalmed for a day or two, and the weather extremely hot, inso much as the winde could not beare the sailes from the mastes, but were faine to hull in the Sea, to our great discontentment, that before had used such great diligence and haste to meete with our Admirall, and the rest of the Fleete.

㉒ 本籍七頁を参照。

㉓ Milgate, pp. xxxix-xl.

㉔ Cf. R. C. Bald, 'Donne's Early Verse Letters', *Huntington Library Quarterly*, XV (1952), pp. 283-89.

㉕ Purchas, vol. XX, p. 97.

㉖ Cf. Stephen J. Greenblatt, *Sir Walter Raleigh, the Renaissance Man and His Roles* (Yale University Press, 1973) and *Renaissance Self-Fashioning, from More to Shakespeare* (The University of Chicago Press, 1980).

㉗ Cf. Philip Edwards, p. 3.

本稿は、昭和六十二年度文部省科学研究費補助金の交付をうけた共同研究、「イギリス・ルネッサンス文学と旅」(課題番号六二二五〇二五二、代表研究者 櫻井正一郎)に対する未完の報告である。なお、分担研究者田中 督、水野真理、サイモン・リース各氏の報告は、本誌前号でおこなわれた。